

SHIZUOKA PRIDE 2022

招待試合 慶応義塾大学 vs 同志社大学

令和4年6月26日(日)13:00 キックオフ

静岡エコパスタジアム

晴れ・微風・グラウンド良

慶応義塾大学 34-7 同志社大学

(前半 15-0)

【103回を数える日本最古の大学定期戦が静岡で初開催される】

春シーズンの最後を飾る第103回目となる伝統の慶応義塾大学と同志社大学の定期戦が、静岡のラグビーファンを集めたエコパスタジアムで開催された。

前回勝者の慶応義塾大学による盾の返還式の後、午前中にスタジアムの芝を濡らした雨が上がり、かなり蒸し暑いコンディションの中、同志社大学のキックオフで試合開始となった。

試合直後からの攻撃で、最初にチャンスを得たのは慶応義塾大学。

前半3分、マイボールスクラムから大きくゲインし、ゴール前5m付近で相手のノックオンオフサイドのペナルティから速攻でリスタートして、FL今野勇久が右隅にトライし先制(5-0)。CTB永山淳のコンバージョンキックは失敗するも、この後もテンポよくボールを回し、序盤から慶応義塾大学が終始攻め続ける。

同志社大学も前へ前へという気持ちはあるものの相手の防御を崩せず、敵陣深くに攻め込むも大事なところで小さなミスを犯し、なかなかスコアできない。

前半の中盤は、双方互角の戦いが続き、試合は膠着状態となる。

試合が動いたのは前半34分、敵陣22mライン右中間付近で同志社大学のペナルティから得たPGを、慶応義塾大学CTB永山が今度はきっちりと決め3点を追加する(8-0)。

なおも続いて慶応義塾大学の攻撃が冴え、前半39分、同じく敵陣22mライン付近のマイボールラインアウトからモールを形成、そのまま押し込みHO中山大暉が左中間にトライ。CTB永山のコンバージョンも成功し、15対0で慶応義塾大学が同志社大学をリードし前半を折り返す。

同志社大学も敵陣近くまでボールを運ぶが、ミスやターンオーバーなどで流れをつかめず、チャンスをものにできなかった前半となった。

後半に入ると同志社大学は、前半の反省を生かし開始直後から見違えるような積極性を見せスコアにつなげる。

後半3分、慶応義塾大学のペナルティで得たラインアウトから連続攻撃を仕掛け、敵陣5mライン付近の中央のラックから右へ展開し、WTB 芦塚仁がステップを踏み敵をかわし、内に切り込みゴールポスト右へトライ。SH 藤田海元のコンバージョンも成功し、7点を返す(15-7)。

しかし、その後も同志社大学は攻めるものの、慶応のディフェンスを崩せず、次第に慶応義塾大学優勢の時間帯となり、自陣に貼り付けの状態となる。

慶応義塾大学は後半27分、敵陣5m付近のラインアウトからモールを形成、左に展開したところでCTB 永山がパスを受け抜け出し、左隅にトライ。自らコンバージョンも決め、22対7と引き離す。

相手に隙を与えない慶応義塾大学は後半34分、敵陣ゴール10m左中間の密集からのグラブキックのボールを、交代したWTB 大野嵩明が右隅で押えてトライ(27-7)。CTB 永山のコンバージョンは失敗に終わるが、攻撃の手を止めない慶応義塾大学は、後半41分、敵陣5mライン付近中央の密集からゲインラインを突破、SO 山田響が抜け出して右中間にトライ(32-7)。最後はCTB 永山のコンバージョンが成功し、試合終了となる(34-7)。

全体的には、終始、慶応義塾大学が攻守とも落ち着いて試合をコントロールしていたように感じられた。同志社大学も小さなミスやペナルティを少なくし、セットプレーの精度を上げることができれば、後半開始直後に見せたひたむきなプレーから流れを掴み、試合の主導権を握れたように思えてならない。

今後、互いのチームが伝統の定期戦で得た反省点を修正し、チームとしての完成度が上がった本格的な冬のシーズンで、両校が再度の対戦機会に恵まれることを期待したくなるような一戦となった。

(文責：静岡県ラグビーフットボール協会 小林聖子)